

カフェノカチ

堀 家 敬 嗣

CAFÉ — Teatism within the Taste of Coffee

HORIKE Yoshitsugu

(Received September 25, 2015)

i. “カフェ”とはなにか

かつて「ではカフェーはお嫌ひなんですか」¹と問われた谷崎潤一郎は、「えゝ……カフェーへモノを喰べに行くとするれば、小料理屋ほどのうまさが無いし、女を張りに行くには、あんまり落ちつきがなさすぎますからね。特に飲み物と来ると、芋焼酎がウキスキーに化けて出て来るんだから全くたまりませんよ」²と嘆いてみせた。1931年あたりのものと思しき谷崎のこの言葉が現在の“カフェ”に通じるころは、おそらくほとんどない。それでもなお、彼の叙述は、まがりなりにもカフェーを名乗るからにはなによりもまず珈琲が提供されるはずが、酒類を勧め、しかも谷崎自身を含め当時の誰もがこの事実をさほど奇妙ともみなしていなかったことを証言している。

もちろん、「震災以来急激に増加した酒類販売業者は、近来益々その数を加へ、最近の新規開店の店は九割迄カフェー、バーであると云はれ」³たらしく、こうしてカフェーとバーとが当たり前のように同列に扱われるなか、とりわけ「プランタンは、日本におけるカフェーの元祖だつた」⁴その一方で、たとえば「[「コロバン」はアルコールを置かず、菓子に専門にするカフェーを独乙語でコンデライトといふが、こゝがそれだ」⁵とされ、また「[「エスキモー」は店頭に美しい果物を飾り、ソーダ水、アイスクリームの看板を掲げてゐるが、酒も少しはあり、コーヒーがうまいといふ」⁶のだから、これらカフェーのすべてで遺漏なく酒類が提供されていたわけでも、また逆に珈琲をまったく提供していなかったわけでもないようである。

なるほど、そうしたカフェーの類いであっても「喫茶店では、第一に資生堂を挙げねばならない」⁷ものの、“カフェ”の定義をめぐって考慮されうるもっとも広義のものであろう珈琲を提供するという行為が、そこでは最低限の条件でさえなく、このことをもって、往時からすでに“カフェ”には定まったかたちのなかったことを十分に示唆してあまりある。そして今日もなお、わたしたちは、「結局定義はよくわからないまま、勝手に「カフェ」と呼んだり呼ばなかったりしている」⁸のである。

ところで、「事業所としての喫茶店の数——カフェと呼ばれる店舗も多く含まれる——は、一九八一年の全国一五四、六三〇店をピークに一貫して減少している。二〇〇六年には八一、〇四二店とほぼ半減した（事業所統計調査）。にもかかわらず、「カフェ」という言葉を目にする機会は九〇年代後半からうなぎのぼりに増えた」⁹。確かに、あらかじめ谷崎のカフェーのころから最低限の条件と思しき珈琲の提供の有無をも不問としてきたように、「カフェの定義に今のところ共通理解はないわけだが、多くの人が連想するとされるのが、フランスのカフェに範をとるオープンカフェ、「スターバックスコーヒー」(…)に代表されるシアトル系のセル

フ式コーヒーショップ、そして二〇〇〇年前後に急速に増えた個人経営のカフェ群である」¹⁰。加えて、さすがに今日では、そうした“カフェ”のほとんどすべてで多かれ少なかれ珈琲は提供されうるものと想定されようとはいえ、「しかし、カフェで重要なのはコーヒーの味よりも「空気感」である。しかも、その良し悪しの基準が主観に委ねられていることがむしろ肯定される」¹¹以上、“カフェ”をめぐる言説は、一般性よりもその個別性をこそ、分析し、記述するその対象とみなす傾向へと収斂することは不可避である。

この傾向は、“カフェ”と同様にわたしたちの生活にきわめて近い現象である映画をめぐる言説にも、かつてうかがえたものである。そのため、たとえば映画研究の対象を規定するにあたってジルベール・コアン=セア Gilbert COHEN-SEATが提起した論点は、“カフェ”をめぐる言説のありようについても少なからず参考となるにちがいない。

コアン=セアによれば、「映画を定義する任にあたった人間が、自分たちの性格が求めるものや自分たちの主張の特殊性に従って映画を性格づけたとしても驚くにはあたらないだろう。(…) 疑いなく映画の性格というものは、あらゆる可能なものを受入れることにある。こういう可能なもののリストを(…) つくろうとすれば苦勞するだろうし、誰にも利益にはならないだろう。何故なら、(…) 事実そのものを捉えることに専心するどころか、各人はそれについて自分がいだいたり、あらかじめ自分のまわりにつくられた観念にしがみついているからである。この映画というスペクタクルに関しては、日常的な実践とその簡略なデータから出発する傾向があまりにも多く見られる」¹²。

ここでの映画を“カフェ”へと置き換えたところで、おおよその事情にはなんら違和感がない。とはいえ、映画の場合とは異なり、「[「カフェ」]という言葉の増殖力に比して、現実のカフェに日常的に通えた人などほんの一握りだろう。ならば、カフェの直接の客になれない人たちは、代替の方法でカフェブームを消費したのではないだろうか」¹³。要するに、その個別性において複製されようがない“カフェ”は、映画作品の上映用プリントのごとくそれ自体を増殖させることをけっして許容しないのである。

なるほど、集客力に優れた人気の“カフェ”の新奇な成分を模倣し、その特殊性をある程度まで転用することは可能であるかもしれない。そしておそらく、こうした意図に応じて流通し、消費されただろうカフェブームとは、“カフェ”という事実そのものではなく、それについて人びとが抱いたりそのまわりにつくられた観念をもって維持された事象であったことは疑いない。つまりそこでは、多彩な“カフェ”の個別性がそれぞれ相応に嗜好され、このブームを直接的に支えていたわけでは必ずしもなく、特殊な“カフェ”の簡略なデータとしてなにがしかの媒体がもたらした図像的な紹介や、ひいてはこうした露出の仕方の総体として結果的に獲得された曖昧な観念ないしイメージたる“カフェ”が、あくまでも間接的な経験のうちに消費されたのである。

映画をめぐっても弄されえたそうした類いの言説について、コアン=セアは、「映画作品（フィルム）と映画（シネマ）を接合させ、一方が他方によって定義されると仮定し、しかもそれ以上の努力をせず、これらの現象が何であるのかを識ることが当然であると認めること」¹⁴に難点があると指摘している。映画の場合には、ある作品の原版となるネガ・フィルムの物理的な劣化さえ考慮しなければ、ここから同じ映画作品の上映用プリントをいくつも焼き増し、これを無限に増殖させていくことは、原理上はきわめて容易である。映画に固有のそうした機構的な原理が、映写機と映写幕が設置されうる世界のどこであれ、この映画作品の上映におおむね等しく立ち会うことを可能とする。だからこそ、映画をめぐる言説には、観客の一人ひと

りにおける映画作品の受容の次第がたやすく浸入するのである。

ところが“カフェ”の場合には、当の“カフェ”は世界にふたつと存在しない。その個別性の体験を、簡略なデータないし図像の紹介とともに抽象的なイメージのうちに希釈し、曖昧に流布させた「典型的な機会は雑誌である」¹⁵がゆえに、「カフェのレシピやインテリアを紹介する「カフェ本」に範を求め」¹⁶てこれらが消費されたところで、その経験は特殊性を強調した静的かつ一面的なものに始終せざるをえない。そのすえに、「二〇〇四年頃には「カフェブームは終わった」と書かれ、実際に多くの店が閉店して」¹⁷しまおうとも、あのカフェブームが、それぞれの“カフェ”に固有の空間と時間とを反映しないような、したがってそこでの体験の具体性、いわばその出来事性とは無縁の事象であった以上、いかにもそれは妥当なことである。

このように、もはや「カフェはお金にならず、儲からなくても続ける意味を見出している店しか続かない」¹⁸現状にあっては、そうして淘汰を経由した“カフェ”の具体的な個別性、そのかたちだけが、“カフェ”の価値を決定づける。なるほど、「結局、個別的で局地的で個人的な映画作品は、ただちに普遍的な証人となる」¹⁹とはいえ、それは映画に固有の構造的な原理によって、単に権利上のみ保証された普遍性であった。けれど“カフェ”については、まさにこの体験の個別性においてこそ、そのかたちが実現する。

たとえそこには「基準が無いのでお互いの「深さ」の正しさは決まら」²⁰ず、もっぱら「相手のセンスへの主観的評価があるだけで、ジャンル全体をふまえて基準の理解度の「深さ」を競う形にはならない」²¹としても、「カフェのかけがえなさを、各自が「深さ」として語ること」²²を忌むべきではない。それどころか、各々の“カフェ”に固有の空間と時間とに直接的に関係する個別性の体験の具体性は、これがまさしく強度として出来るものである限りにおいて、いまやただそこから語ることだけが、“カフェ”をめぐる言説に許された唯一の体裁ではないのか。「我々の展望は映画作品の製造からではなくて、スペクタクルの受け手を基準にして出発するのである。映画によって設定されたこの新しい対象と行為が見出されるのは、実際<上映>においてであり、<上映>の間である」²³。

ii なぜ“カフェ”なのか

確かに、個別性の体験の具体性や、その強度についての言及は、多かれ少なかれ主観的な価値判断の浸入を免れることはできない。コアン=セアによって「基本的な区別が当然、フィルムの事実（フェ・フィルミック）と映画的事実（フェ・シネマトグラフィック）の間に設けられる」²⁴とき、映画には、その上映に際してひとつの単位としての映画作品を成立させるような、いわば素材に相当する構成要素が客観的に前提できる。要するに、「フィルムの事実」は映像の組合せ（自然的ないし約定的な視覚的映像と音響的ないし音声的な聴覚的映像）の一定の体系によって、世界や精神や想像力、または人間や事物の生活を表現する」²⁵わけだが、他方で“カフェ”に関しては、映画作品に対して保証されているようには一定の体系を客観的な構成要素として期待できない。

それでもなお、そのような言説のいちいちに揺るぎない事実の客観的な記述となることを要求するならば、「「カフェ」という人気の呼称を、多種多様な店と業種が好き勝手に名乗っている」²⁶今日の“カフェ”の一般性としては、この呼称を正当化する口実となる珈琲の提供よりほか、それらの最大公約数を抽出することは困難だろう。そうではなく、ある潜在性が実現するにあたって纏いえたひとつの可能的なかたちとして、すなわち無限に考慮される可能性の範疇におけるひとつの顕在化の様相として、別の可能的なかたちに置換され、自らを刷新することも厭

わない姿勢で個別的な体験を綴ることは、“カフェ”の現在を考察するうえで、これ以外に思案される方策に比してよほど有効であると思われる。

もちろん、かつてコアン=セアが懸念したように、ひたすら「カフェめし、カフェミュージック、雑貨・家具など、カフェにあるアイテム群のステレオタイプ」²⁷を列挙してみたところで、こうした可能性のすべてを遺漏なく汲み尽くして目録に収める企ては徒労でしかない。というのも、個別的な“カフェ”の体験とは、絶えず強度的なものからである。「強度とは、感覚されるものの〔充足〕理由たる差異の形式である。一切の強度は、差異的=微分的な強度であり、〔媒介されていない〕それ自身における差異である」²⁸。“カフェ”の可能性は、差異における強度的な体験として、常に個別的な具体性のなかで反復されるのである。なるほど、個別的な体験のいくつかには、外観的に類似しているとみなされるところがあるかもしれないが、それだからといって、こうした類似の如何は、強度的な体験としての“カフェ”の個別性にはいささかも関係がない。強度とはそれ自身がひとつの全体なのであって、別の集合を構成するある部分との類似があろうとなかろうと、そうした分割可能な部分の集合ではないからである。

口実として珈琲を提供することそれ以外には、自らをひとつの単位のうちに回収する体系化の試みになんら配慮を表明しない“カフェ”について、けれどここではやはり、その個別的な具体性を、コアン=セアのいうフィルム的事実の規定に倣って“カフェ”的事実と規定しよう。それらの“カフェ”のすべてを基礎づける唯一の条件たる珈琲の提供は、これを一定の体系の存立平面とするにはいかにも心許ない。しかしながら、たとえどれほど心許ないものだとしても、これが“カフェ”の呼称に正当性を付与する限りにおいて、それは各々の“カフェ”をまぎれもなく“カフェ”たらしめる唯一の磁力となる。そしてつぱらこの磁力こそが、“カフェ”の個別性を叶え、これを固有の空間と時間とに相応しいかたちで可能的な出来事を実現していく磁場へと変容させる。こうして、それぞれの仕方で“カフェ”は人間や事物の生活を表現する。

だが、それにしても、それら“カフェ”をめぐる記述される言説とは、いったいいかなる目的のもとに提示されるべきだろうか。

かつて「好きな雑貨を選んで自分だけの空間を作り上げるという価値観」²⁹を抱き、珈琲の提供を口実に「東京カフェ」とでも呼べる、店主の嗜好とセンスで勝負する個人経営のカフェ」³⁰群が牽引したカフェブームは、ほどなく衰退の憂き目にあうことになった。それでもなお、ここでの淘汰のすえに生き残った各々の“カフェ”においては、依然として「オーナー達は自分達の商品の本質が、空間、またはその空間にいることの意味であることを認識」³¹せずにはいられないだろう。

柳宗悦によれば、こうして「見る者によって作物は選ばれ、用いる者によって、それが生活に交わってくる。だがそれらの二つは味わう世界である。楽しむ生活である」³²。珈琲の提供を口実にカフェブームの渦中で個人経営の“カフェ”群が真に提供してきたもの、そして淘汰のすえに生き残った“カフェ”が各々の仕方で珈琲とともに提供するもの、それは、結局のところ固有の空間であり、そこを通過していく時間よりほかない。いまもって、これら空間と時間を味わい、生活のなかで楽しむことこそが、わたしたちが“カフェ”を訪れる動機であるわけだ。

この限りにおいて、単にこれを味わい、楽しむためだけならば、おそらくそこに“カフェ”を、もしくは映画をめぐる言説など必要ない。「単純に楽しんでいる人は、自分自身のために映画をいつくしむ。そういう人は、映画に手が届き、それを本質的に所有していると思こんでいる」³³。しかしながら、いったんはそこで手が届いたかに思われた映画とは、映画に固有の機能的な原理が担保したあの権利上の普遍性がそう錯覚させる、いわば映画の幻影にすぎない。

「意識時代に住む吾々には、(…)美を見、美を味わうほかに、美を想う念があるのである。(…)すべての作物は(…)見られまた用いられることにおいてのみ育つのではない」³⁴。要するに、映画について、映画とともに思考された一世紀が今日の映画を育くんだように、“カフェ”は、「今は考えられることにおいて一層明らかにその存在の理由を獲得する」³⁵のである。

そうである以上、“カフェ”をめぐる言説は、“カフェ”の事実から分化しつつも絶えずそこに回帰し、生活の側から、暮らしの側から“カフェ”のかたちを模索するものとなるだろう。ここではコアン=セアのいう映画的事実の規定を参照しながら、これを“カフェ”的記述と規定しよう。

“カフェ”的事実とは、ある“カフェ”の空間と時間を共有しえた他の誰にもなお、いささかも共有されることのない個別的な体験であり、そこで実現された具体性のなかで反復される強度である。この意味において、ロラン・バルトの言い回しを借りるならば、それは「プンクトゥム(punctum)」³⁶に相当するかもしれない。「プンクトゥムとは、刺し傷、小さな穴、小さな斑点、小さな裂け目のことでもあり——しかもまた、骰子の一振りのことでもある」³⁷。そしてたとえば「ある写真のプンクトゥムとは、その写真のうちにあって、私を突き刺す(ばかりか、私にあざをつけ、私の胸をしめつける)偶然なのである」³⁸。骰子の一擲のうちに実現される偶然の出来に不意打ちされること。その都度のこれら不意打ちが、わたしたちにこの傷を、この孔を、この染みを、この亀裂を穿つ強度として体験される。

“カフェ”的記述とは、こうした体験の強度を頼りに、けれどそれを微分し、ここから分裂し、それとの齟齬を撒き散らしながら、なおこれとは合致することなく逸脱していくような、もうひとつの“カフェ”的事実、その現象化のことにほかならない。「無限に二分化され、際限なく共鳴してゆく差異の以上のような状態を、わたしたちは齟齬と呼ぶ。齟齬、すなわち差異、あるいは強度(<強度の差異>)、これらは現象の充足理由であり、現象するものの条件である。

(…)現象するものの条件は、空間と時間ではなく、即自的な<<不等な>>ものである。換言すれば、<強度の差異>のなかに、つまり差異としての強度のなかに含まれ、そこで規定されるような、齟齬の働きである」³⁹。

こうした、それ自体における以外にはいかなる均等性のうちにも配分されない即自性のもとに記される言説は、必然的に「<<科学的に>>孤立無援の状態」⁴⁰へと陥らざるをえない。というのも、科学はまぎれもなく一般性の側にあるからである。しかしここでは、比較の可能な尺度をもって個別的な出来事的具体性を抽象化し、これを一般性の名のもとに相対化することによって世界を体系的に把握する科学の姿勢に抗ってまで、柳が強弁したように、「科学者は科学の制限に対して謙遜な承認を持たねばならぬ。相対の科学は究竟な美の世界をも犯すことはできぬ。科学は美に服従し奉仕すべき科学である」⁴¹などと主張するつもりはない。

むしろここで要請されることとは、“カフェ”的事実をめぐる駆動させるにふさわしい、新しい科学の方法を見定めることであるだろう。したがって、かつて写真をめぐる思考を展開するにあたって「いったいなぜ、いわば個々の対象を扱う新しい科学がないのか？なぜ(「普遍学」Mathesis universalisならぬ)「個別学」(Mathesis singularis)がないのか？」⁴²と自問したバルトが、そのすえについて「資料体とは何の関係もない、ただいくつかの肉体にすぎなかった」⁴³はずの「わずか数枚の写真、私にとって存在することが確実な数枚の写真を採用」⁴⁴し、「若干の個人的反応から出発して、それなしでは「写真」が存在しえないような、「写真」の基本的特徴や普遍性を定式化しよう」とつとめ⁴⁵たことは、ここでいう“カフェ”的記述のありようへとそのままつながる。

iii. “茶”の“道”

だからこそ、“カフェ”的記述では、これが思考を開始するにあたって、まずは“カフェ”にとって唯一の根本的な成立要件、その存立平面とっていいだろう珈琲の体験について、その可能性を検討することが駆動の端緒となる。“カフェ”を名乗ることを正当化する口実として、多かれ少なかれこれが提供されることをもってその欠格性の不在証明となる珈琲は、それゆえどこでもかまわない任意の“カフェ”を訪れた利用客たちが、実際にそれを注文しようがしまいが、すべからく“カフェ”的事実のうちに実現の可能性を潜在させているにちがいない。そしてそこで提供されるあれらの珈琲は、あるいはむしろこれを契機としてそこに出来るかもしれない強度の体験は、ほかでもない今日の日本においてこそ、“カフェ”のかたちを適宜そのように実現する機会を召喚するのである。

民芸を発見し、その正当な評価と継承を提唱した柳宗悦には、今日の日本における“カフェ”のかたちを予見した先達として教示されるところがいかにも多大である。

ひとまず「私の見るところでは」⁴⁶、と留保しつつも、1950年の柳は、「茶道の歴史は功罪相半ばして」⁴⁷おり、「特に近年ますますその道が流行するに及んで、弊害も著しくなってきた」⁴⁸ことを指摘のうえで、「茶道を批判」⁴⁹する文章を記す。<「茶」の病い>⁵⁰と題され発表された「この一文」⁵¹は、「多くの病いを治療」⁵²するために「飲まねばなら」⁵³ない「苦い薬」⁵⁴として、それら「一切の病いを超えて、健やかな「茶」が再び建てられ」⁵⁵その「良薬たらんことを欲するもの」⁵⁶であったとされる。

ここで柳が「特に」⁵⁷と強調を施し、「早く切開せずば死は近いであろう」⁵⁸とさえ憂慮したいわば「「茶」の癌」⁵⁹、それは、彼によれば「その封建性」⁶⁰である。

なにしろ「民主主義の今日にあって、最も呪われているのは封建制度」⁶¹にちがいないはずが、「今の茶の湯は、不思議なくらい家元中心主義で（…）さながら茶界の王のごとく取扱う。その存在は極めて貴族的な封建的な性質を帯びる」⁶²。こうした「家元、特に表裏両千家を中心とする封建制度」⁶³においては、「一つの特質は代々世襲だということになる」⁶⁴ものの、「しかし世襲する者が、常に誰よりも正当な茶人だと誰が保証するのであろう」⁶⁵と疑問を表明する柳にとっては、「家を継ぐ者が、必ずしも最もよく法を継ぐものとはいえないから（…）千家に生まれた者がすべて第一流の茶人だとは決していえ」⁶⁶ず、したがって彼は、「こんな明々白々な事実を無視してまで家元を神様のごとく扱うのは別に理由があるからだと思」⁶⁷わずにはいない。

そして柳はその理由を、「家元は免許状を出すことによって生活し、貰う方も免許を受けることで自分の生計を立てる」⁶⁸という「経済的相互寄食の制度」⁶⁹に帰着させる。「人にも「茶」を教えるため」⁷⁰の「客観的な資格」⁷¹、「その客観的保証を「許し」と称し、その許可権を家元に持たせてある」⁷²こと、この「経済的仕組み」⁷³にあっては、「今の茶会に金銭の力がどんなに多くものをいっていることか」⁷⁴。すなわち、“茶”の“道”の家元でありその講師となることが特定の職種への就業として扱われ、しかもこの就職それ自体のためにさらに金銭の威力が介入してくる現状を、彼は厳しく糾弾してみせる。まさに「ここに封建制度の典型的弊害が見られるのである」⁷⁵。

こうして「茶道を早くこの不合理な封建制度から解放させねばならない」⁷⁶と主張する柳は、いわば“茶”の民主化を説いているわけだ。加えて、単にこれら家元制度における「経済的桎梏」⁷⁷に限らず、あまねく「茶礼に貧富の差はないはず」⁷⁸であり、「貧しい者とても「茶」をたしなむ

ことができる。誰だとして許されているのが茶事である。否、人間の茶事であるからもともと公有のものであるとってよい⁷⁹と宣言する彼にとっては、「茶」にはもっと自由があるべき⁸⁰だからこそ、「将来の「茶」はむしろ「茶」を金力から解放すべき⁸¹」なのである。要するに、「茶」もまた「民の茶」でありたい⁸²と柳宗悦は願う。

それゆえに、彼が「茶道を想う」⁸³とき、「真の「茶」⁸⁴とは「生活で美を味わう」⁸⁵ことにほかならない。そうでなければ“茶”に期待しうるところなどもはやない。「人は「茶」を棄てることも、「茶」の法をまで捨てることはできぬ。「茶」の道は美の法である。もし美に新しい形が現れるなら、そこにまた新たな「茶」が生れるであろう⁸⁶。こうして「平易なもの、素直なもの、質素なもの、簡単なもの、無事なものから取上げ」⁸⁷、「波瀾のない平常の世界に、最も讚美すべき美を見つめ」⁸⁸の場合には、「美の一つではなく、却って美の法である」⁸⁹ところの「真の「茶」は型でいよいよ自由である」⁹⁰だろう。

事実、柳宗悦は、生活のなかに美を味わい、波瀾のない平常の世界、不断ないし普段の世界に美をみつめるべく、いったん茶を棄てることによって民主的な“茶”のありようを模索し、新しい時代に添った新しい“茶”のかたちを見定めようと実践的に試行する。

なによりもまず、「日本民藝館で始めて茶会が開かれたのは、昭和三十年十二月五日のことである」⁹¹が、「棟方志功、(…) 谷川俊太郎、大岡信氏ら」⁹²の同席のもと、「当日は茶会に先立って柳氏により「茶道の功罪」と題する講演が行われ」⁹³たこの茶会に続いて、さらに「第二回の茶会が開かれ、コーヒーの茶も内輪でいろいろと考えたりした」⁹⁴と伝わる。「昭和三十一年四月二十三日」⁹⁵の日付けで茶会記も残されている第2回のそれに対して、「会記のようなものは残っていない」⁹⁶という第3回の茶会が、ただし「三十一年十二月初め、コーヒーに依って試みられた」⁹⁷ことは確からしい。

つまるところ、柳は、自らが館長を勤める日本民藝館にて催した茶会において、文字どおり茶を、つまり茶葉を棄て、これに代わって珈琲を“茶”の“道”に持ち込んだのである。茶を点てるのではなく、珈琲を淹れる茶会。封建的な束縛から解放された戦後民主主義にふさわしい新しい“茶”のかたちを求めて、不断の世界を見回し、普段の生活をみつめなおすとき、茶があってこそその茶道というもっとも根本的な固定観念からさえ、“茶”はいよいよ自由になることができる。

もちろん、たとえば「ワインの自惚れやコーヒーの自意識がなく、またココアのように無邪気ににやけることもない」⁹⁸ような「茶の味には、病みつきになってときに観念的にも作用してしまう繊細な魅力がある」⁹⁹と嘯く1906年の岡倉天心から、ちょうど半世紀の時間を隔てて発揮された柳宗悦のこの柔軟さは、第2次世界大戦を経て自由と民主化に与せんとする潮流への、いささか強迫神経症めいた同調を感じさせなくもない。とはいえ、そうした姿勢は、「奇妙な話ではあるが、これまでに人間性はもうティーカップのなかで遭遇しているのだ。茶とは、世界的に尊重されているアジアでは唯一の儀礼なのである。わたしたちの宗教も道徳も軽んじる白人が、この褐色の飲料についてはすんなりと受け入れたのである」¹⁰⁰と誇って倦まない日露戦争直後の岡倉についても同様に看取できる類いの、いわば各々の時代の雰囲気因るにすぎない。

ここで重要なこと、それは、茶葉を発酵させた紅茶のものである透いた赤褐色ではなく、岡倉がワインの自惚れに対照させて自意識と形容した珈琲の内向性、すなわちこれは西洋の自意識であり、それゆえあの個人主義の象徴であるかもしれない不透明な黒褐色の、ほのかに酸味がかかった苦い液体を、柳が、やはり岡倉によって世界の誰もがそこで互いに邂逅しう契機、

その現場とみなされた茶の器に淹れ、茶会の列席者とともこれを飲み干し共有することで、“茶”に外部をもたらしたことである。たとえば「個人主義に育まれた近代は、絵画の運命をひとり卓越した個人の才能にのみ委ねた。だがそれでいいだろうか」¹⁰¹。柳が催したこの茶会とおしてここで外部に開示されたもの、それは、内向しがちな珈琲の自意識であるとともに、まぎれもなく“茶”の封建性であったはずだ。

このように、柳宗悦は“茶”の“道”に珈琲の味を導いた。そしてそのことは、翻って珈琲の味に“茶”の“道”が敷かれ、ひいてはその味を借りて今日の日本の“カフェ”のかたち“茶”の精神が浸透しうることを意味している。

これより半世紀前の岡倉天心は、“茶”の湯の形式性をではなく、ほかでもない茶の味それ自体をもって、各国各地の風土に適った固有の仕方ではあれ、茶の儀礼が世界に普及し、「その飲料が純粹さと精妙さに注がれる崇拜のための口実となった」¹⁰²ことを、この起源たるアジアの立場から誇った。今度の柳宗悦は、むしろ“茶”の真髓がその味ではなく、それを場合に依じて適切に用いる仕方にこそ存していることを、茶葉から代えた珈琲の味を借りて提示してみせた。こうして封建的な制度性から自由になったとき、“茶”は、「用い方が(…)型にまで高まったのである。個人を越えたのである。法にまで徹したのである」¹⁰³。珈琲の自意識も、それが“茶”として供されるにふさわしい型を拵えられ、そこに置かれることで、個人を越え、“茶”となる。「型はいわば用い方の結晶した姿ともいえる。煮つまる所まで煮つまった時、ものの精髓に達するのである。それが型であり道である」¹⁰⁴。

もはや“茶”の“道”は、茶葉の味のうちにのみ特権的に存しているのではない。たとえばそれは、珈琲の味のなかにも、ワインやココアのそのなかにも存している。とはいえ、“茶”の“道”をめぐる柳のそうした姿勢は、岡倉の言質をもってあらかじめ保証されてもいた。岡倉によれば、「「道」は、「通路」というよりは「通過」のうちにある。それは「宇宙的な変化」の精神——新しいかたちを産み出すためにそれ自身へと回帰するような永遠の成長なのである」¹⁰⁵。通り過ぎた結果として残された空間、それが“道”なのではなく、そこを通り過ぎる行為、そこを通り過ぎようとする意識、そこを通り過ぎつつある運動そのもの、要するに、絶えず変化しつつ持続する生成それこそが、ものの精髓に到達するための“道”なのである。

iv. “一期一会”

しかしながら、定義上、この“道”は姿を変容させつつ永遠に自身に回帰し、いつまでもその可能性を汲み尽くされることがないため、それが煮つまって最終的な型として完成することも、したがって唯一の精髓に到達することもありえない。換言すれば、定まった通路に留まることなく生成を持続することそれ自身が精髓であり“道”なのであって、ひとたびこの運動を停止するならば、その精髓を、型ないし法を、つまりは“道”を、ひとはたちまち見失ってしまうことになるだろう。

一般に“茶”の精神を表象するものとされる“一期一会”の覚悟は、このような“道”の着想を端的に集約している。岡倉天心からさらに遡ることほとんど正確に半世紀、宗観の茶号のもとに井伊直弼は、「そもそも、茶湯の交会は、一期一会といて、たとえば幾度おなじ主客交會すると、今日の会にふたたびかえらざる事を思えば、実に我一世一度の会なり、去るにより、主人は万事に心を配り、(…)客にもこの会にまた逢いがたき事を弁え、(…)実意を以て交るべきなり、これを一期一会という、必々主客とも等閑には一服をも催すまじき筈の事」¹⁰⁶と筆記した。

桜田門外の変での殉難に先立つことわずか2年余り、1858年の井伊がここで説諭するのは、たとえ知己のあいだで定例的に催される茶湯の交会であってさえ、これが単なる繰り返しではなく、立ち戻りつつも前に進むよりほかないような、あるいはむしろ立ち戻ることがそのまま前に進むことであるような螺旋の時間、あの「永遠回帰における反復」¹⁰⁷の剥き出しの時間性に素手で触れる契機になりうるという事実だ。

なるほど、そこには主客のいずれにも見慣れた、馴染みのあいだがらが顔を並べているかに思われる。しかし、あれは本当に前回の茶会で見かけた彼らと同じ存在なのか。それどころか、いままさに視線を交わした彼は、それを交わすまでの彼と同一の存在なのか。おそらく、彼は瞬間においてその都度、新たに生まれ変わっている。その瞬間の彼は、ただ偶然に、かつて彼と呼ばれた存在と時間の蝶番で接合されているにすぎない。「第三の時間、すなわち未来が、(…)時間そのものを直線化するという、未来が、時間そのものを再建し、時間そのものから純粋な形式を取り出すということ、すなわち未来が、時間そのものを「蝶番」の外に出すということ」¹⁰⁸、それは、絶えず更新され、生まれ変わるその都度、裸の存在としての彼と邂逅することにちがいない。

未来という「第三の時間のなかにしか、永遠回帰は存在しない。そこでこそ、凍結ショットが新たに活気づき、あるいは、時間の直線が、言わばおのれ自身の長さの分だけ引かれて、ひとつの奇妙な輪を形成し直す」¹⁰⁹。流れる時間のなかに凍結されたかに見えて、けれど不断に自身を更新して止むことのないストップモーション。ある始点から描かれはじめた円弧が、やがてその始点を終点と設定してひとつの円周となって閉じられるころには、とうに始点は背後に置き去られ、いつまでもそれが円環として閉ざされることはない。不断に更新される彼のありようにその都度の邂逅を試み、この輪郭をおぼろげながら捉えるまでには、すでに彼の存在性は容易にそこに収まってくれなどしない。かくして姿かたちでも人となりでもなく、それはただ強さとして、強度としてのみ出来る。「永遠回帰は、質的でも延長的でもない。それは強度的であり、ひたすら強度的なものである。言い換えるなら、永遠回帰とは差異について言われるものであるということだ」¹¹⁰。

したがって、“一期一会”の覚悟は必然的にある種の喪失感と諦念とを帯同させずにはいないだろう。捉えたかたちの感触を確信したとたんにその掌中から零れ落ちていく、経験の強度または強度の経験をめぐって描かれた粒子状の輪郭。「主客とも余情残心を催し、退出の挨拶終れば、客も露地を出るに、(…)客の見えざるまでも見送るなり、(…)いかにも心静かに茶席に立ちもどり、(…)今日、一期一会済みて、ふたたびかえらざる事を観念し、或いは独服をもいたす事、この一会極意の習いなり、この時寂莫として、打語らうものとは、釜一口のみにして、外に物なし、誠に自得せざればいたりたき境界なり」¹¹¹。

この極意、この境界に投企することこそが、おそらくは“茶”の真髄、その“道”なのである。なにしろ「茶会とは、茶や花々、図画をめぐって筋書きの綾織りなされる、一幕の即興劇であった」¹¹²。会席のその都度、一定の作法の枠組みに沿いながらも、ただしあらかじめ見積もられた行方などない出来事の綾が、“茶”を契機として即興で紡がれていく。「第三の反復こそが、前と中間とを時間の直線に即して配分し、またそればかりでなく、前と中間とを除去し、それらをして、<これを最後に>というかたちでしかことにあたらせないようにさせ、唯一の時間のために「その都度」を保管するのである」¹¹³。

フリードリヒ・ニーチェFriedrich NIETZSCHEの概念形成を踏まえたジル・ドゥルーズ Gilles DELEUZEによる永遠回帰の理解は、ニーチェと同時代人であった井伊直弼にさきがけ

て、千利休の高弟である1588年の山上宗二がすでにこれを直観していた。「朝夕寄合いの間なりとも、道具の開き、または口切りの儀は申すに及ばず、常の茶湯なりとも、路地へはいるから立つまで、一期に一度の参会の様に、亭主をしっして威づべきとなり」¹¹⁴。たとえそれが朝と夕とを問わずことあるごとに寄り合い、依り合う近しく親しいあいだがらであろうとも、この参会はその都度の邂逅であり、そこで共有される時間は絶えず唯一の時間である。ここで彼らが費やす各々の瞬間ごとに汲みあげられる未来の可能性は、その実現をもってただちに消尽され、この参会を一期に一度のものとする。渦中にある誰に対しても権利上は開示された“茶”の“道”は、それがいつのものであれ、あらゆる瞬間のいずれもがことごとく最後の訪れであることを悟る機会を、その誰にも等しく与えているのである。

経験の通路ではなく、通過の体験であること。とはいえ、誰にも権利として保証された覚悟を、誰もが同様に会得できるわけではないだろう。そしておそらく、この通過の体験は、あらかじめこれを覚悟しておいたところで、そのほとんどの瞬間においてこうした捕捉から逃れ、逸脱するように参会者を露地に、茶室に置き去りにしていく。たとえば「見る者がなければ器もまたないといってよい。眼を有さない時、器はただ静止の状態にある。それはたかだかのある事物というに過ぎない」¹¹⁵。

常に更新される体験のありようを事後的に証言する知覚と認識の経路としての空間、すなわち露地なり茶室なりに残された彼らは、これら通過の体験の名残り、その残滓としての経路を省みることによって、かつてそこで通過の体験と擦れた、あるいは擦れえたかもしれない感触のどれほどかをようやく復元ないし想起する。この作業にともなって、もはやそれがここにはなく、それが再びここに訪れることもないという事実をめぐる寂寞とした感覚を確認するよりほか、“一期一会”の極意、この境界へとその体験を投企させるすべはない。

なるほど、こうした喪失感と、そこで失われたものに対する慈しみにも似た諦念もまた、一方では、体験のありようを事後的に証言する空間にまわりつき、やはりその体験の名残りないし残滓となって知覚と認識の経路を、したがって経験の通路を構成する要素であるかもしれない。

それでもなお、これら喪失感や諦念は、経過の体験を事後的な再提示として知覚や認識に追従させる経験の通路でありながら、他方では、まさに瞬間ごとに更新されていくそのような喪失感や諦念の体験それ自身、絶えず生まれ変わり、不断に生成していく喪失感や諦念の経過それ自体であるはずだ。かつてあった、もしくはかつてありえたひとつの可能性の実現をめぐる事後的な追認であるとともに、継起する時間の紐帯なり蝶番をひとつたび脱臼させていままさに釜の一口と打ち語らうとき、それは、すでのないほかの瞬間の単なる再提示であることを揚棄し、来たるべき一瞬の新たな提示そのものとなる。

明滅する現在を捉えるやいなや、その瞬間はとうに過去へと回収されてしまっている。流れる時間の最先端で更新されつつある現在の一点を見定めようとどれほど目を凝らしたところで、そこには瞬間の抜け殻しか映らない。そうではなく、一瞬のいちいちにおいて、来たるべき未来を、実現されようとしているその可能性を待つこと。「この先、美味いとも不味いともされない煎茶のなかで自分を待ち受ける運命に向けられた客の達観した諦念は、このほんの一例において東洋の精神が至上に君臨することを宣言するものである」¹¹⁶。自らを取り巻く状況を静かに受け容れ、その一瞬を、行方の定かではない可能性の実現をただひたすらに待つことだけが、通過の体験と対峙する方法であるだろう。

v. “茶”のある暮らし

それゆえに、ここでは「器とは「見られつつある器」以外の何ものでもない。単なる器というがごときものは、怠惰な仮想に過ぎない。(…) 器物の存在は見方の裡にあるのである。それは見る者の器である」¹¹⁷。見つつある通過の体験が、ある器をそのような器たらしめる。器のかたちとは、まぎれもなく、こうして見られつつあるかたち、見るものの視線との相互作用においてその通過の体験のもとに実現される出来事である。ここで器の全体は絶えず更新され、変化することを止めない。

このとき、そうして器を見つつある柳宗悦は、まさしくアンリ・ベルクソンHenri BERGSONとともにある。「現在は存在するものであるとかつてに定義されるけれども、そのじつ現在はたんに出来つつあるものにすぎない。現在の瞬間は、もし過去を未来から分かつこの不可分な境界の意味に解されるならば、これほど存在しないものはない。私たちがこの現在はあるべきだと考えるとき、それはまだありはしない。またそれは存在していると考えるときは、それはすでに過ぎ去っている。(…) だから諸君の知覚はたとえ瞬間的であっても、計算できないほどたくさんの思い出される諸要素からなっていて、本当は、あらゆる知覚はすでに記憶力なのだ。純粹な現在とは未来を侵蝕する過去のとらえ難い進行なのだから、私たちは實際上過去を知覚するのみである」¹¹⁸。

そしておそらく、そうした諦念とともに“一期一会”の覚悟に帯同する喪失感とは、もっぱら瞬間の抜け殻を置き去りに通過していった失われた時間に向けられたものであるばかりか、一瞬のいちいちにおいて実現された各々の可能性が顕在化する引き換えに、実現の機会を摘まれて過去一般のうちに潜在したままついに出来の契機に恵まれなかった、あれら無尽蔵の可能性を惜しむものであるにちがいない。「記憶を再発見して、私たちの歴史の一時期をよび起こそうという場合、私たちは、現在から離脱することによってまず過去一般のうちに、ついで過去の或る一領野に私たち自身を置きなおす独特な働きを意識する」¹¹⁹。

生起しつつある具体性、紡がれつつある出来事の綾は、そこで実現されず、つまるところ知覚も認識もされることのなかったさまざまな可能性の種子を同伴させている。「この流体、この運動、この中心もまた、それら自体、無力な触覚、効果のない衝突、色のない光との関係においてしか規定されない。これらもまたやはりイマージュなのだ。もちろんイマージュは、知覚されなくても存在することができるし、表象されなくても現存することができる」¹²⁰。“茶”をめぐっていままさに実現されつつあるこの運動、この会席には、その陰影のうちに知覚されないまま存在する無数のイマージュがともなう。

なるほど、岡倉が言及しているように、そこでは「茶室の調子を乱す色彩ひとつも、事物の律動を損なうもの音ひとつも、また調和を逆撫でする無駄な所作や、周囲の一体感を台なしにするほんのひとことたりともないまま、すべての運動は単純かつ自然にこなされる」¹²¹だろう。しかしここには、あらゆる色が、音が、身振りや語句さえが、知覚されないまま可能性のうちに潜在し、いまこの会席のそのようなありようを支持している。ここですべての運動が単純かつ自然にこなされうるとすれば、それは、そうした運動が常にこれらの潜在性と不可分のうちに、互いの影響を波及させ合っているからである。

現像されない色、再生されない音、実行されない身振り、発信されない語句。もし仮に「宇宙の任意の場所を考えれば、全物質の作用は抵抗も損耗もこうむらずにそこを通過し、全体の写真はそこでは透明であるともいえる。像を浮き出させる黒いフィルターが、種板の後にない

からだ。(…)それらは存在するものに何ひとつつけ加えない。ただ現実的作用を通過させて、潜在的な作用を残留させるだけだ¹²²。ある可能性が意識的な知覚の黒いフィルターに濾され、現実的作用として実現されるその一方で、その濾過の網目から零れた他の可能性はそのまま潜在性のうちに残留し、誰の耳目にも触れることはない。

そうしたかたちなきイマージュのことごとくに、邂逅の機会を喪失したことへの謝辞のまなざしを送ること。それゆえに、すでに“茶”は茶室のなかに囲われてなどいない。わたしたちの生活、その暮らしのそこそこに、いつも“茶”は存在する。換言すれば、この生活、暮らしそれ自体が、まぎれもなく各々の“茶”の器、または茶室であるにちがいないのである。

たとえば、「今の「茶」がとかく茶室内の「茶」であって、露地より一歩出ると「茶」が消えてゆくような「茶」なのはどういうことか¹²³と疑問を呈した柳にとっては、「ここで修行した見方を、日々の暮しに深く交えてこそ始めて茶室の「茶」が生きてくる。否、ある意味では不断の暮しこそ大切であって、ここに茶生活の基礎がないと、茶室の「茶」は嘘ものになってしまう¹²⁴。

もはや“茶”は、わたしたちの生活、その暮らしとともにある。あるいはむしろ、わたしたちが日々こなしていくこれら生活、これら暮らしの理念的なありようを具体的に実現するひとつの潜勢力として、その可能性は概念形成されうる。「一歩茶室を出て、家庭の暮し、不断の居間、茶の間や台所に入ると、およそ「茶」の心とは関係のないものが沢山つかわれている。そこには茶室の飾りなどとはおよそ縁のない俗な暮らし方が沢山見られる。(…)しかし茶室と茶室外とがあまりにも縁がないと、その茶室は全くただの余所行であって、暮しとは矛盾したものになってしまう¹²⁵。単に茶室ばかりが“茶”に許された固有の空間なのではない。いまや“茶”は、あらゆる空間の、時間のいたるところに潜在し、それにふさわしい可能なかたちのもとに実現される機会を待っている。

この限りにおいて、“カフェ”とは、ある潜勢力としての“茶”の可能性を汲みあげ、これを実現するその都度、それにふさわしい具体性のもとに“茶”のかたちをわたしたちに知覚させる契機となる。より正確には、“カフェ”それ自身が、各々の具体性をもって個別的に紡がれる“茶”の潜勢力の運動、その通過の体験にほかならない。

もちろん、ここで実現しうる“茶”の潜在性とは、それら“カフェ”の具体性のそれぞれに応じてあくまでも偶発的に選択されたものであって、これ以外のわたしたちの生活、その暮らしのなかで最適化された環境のいちいちにおいて、それとは別のかたちでこれを実現するための萌芽はあらかじめ撒種されてもいる。したがって、「茶室には「茶」が濃くても、不断の暮しには「茶」が薄い¹²⁶ような場合には、おそらく、日常の暮らしのありようが、そうした“茶”の潜勢力をそこに十全に反映し尽くすほどには最適化されていないことを意味する。その一方で、ここには“茶”のものとは異なる類いの潜在性がそれとして実現されうるわけだ。

なるほど、「生活が常識的なら茶事のごとき余計な遊びであろう¹²⁷。常識的な生活に、戯れごとと見積もられた“茶”の潜在性が汲みあげられる余地など、けっして多くは与えられようもない。生活の、暮らしのこうした常識性を失調させ、その平滑な表面に“茶”の潜勢力を穿つための齟齬となり、裂け目となり、すなわち強度となるもの、それが“カフェ”なのである。それは、柳宗悦に倣って珈琲の味覚とその芳香を借りつつ、かつて封建的な茶室のなかに囲われていたこの余計な戯れを、生活そのもの、暮らしそのものを楽しむための余裕へと変換する。

だから「[自宅のようなカフェ]と「カフェのような自宅」。この反復作用を経て、自宅とプロが売る空間との上下関係、ひいては家と都市空間(…)の関係は、以前より少しフラットになっ

た」¹²⁸ことは、日々の生活、その暮らしのなかでこうした戯れごとを楽しむべく、もっぱら“カフェ”において局所的に体験されてきた“茶”の潜勢力の通過を、それぞれの自宅にあってもなお、それに最適化されたかたちで個別的に実現する“カフェ”の利用客が増えてきたことの証左となるだろう。とはいうものの、「器物の性質は、作られた時に、決定されてしまうのではない。(…)誰が彼のよき育て手となるか。私は三人の力を数えよう。一人は見る者、一人は用いる者、一人は考える者である」¹²⁹。見るものと用いるものとのあいだの相互作用として生起する“カフェ”的事実は、いままさにこれについて思考する“カフェ”的記述をとおして、それを紡ぐ“茶”の潜勢力に貫かれた一針の穿孔へと珈琲の風味が浸透し、その湿潤を次第に滲ませながら黒褐色に染みていくさまに立ち会おうとしている。

-
- 1 村嶋歸之、『カフェー考現学』、津金澤聰廣・土屋礼子／編、柏書房、2004、p.167.
 - 2 同上。
 - 3 同書、p.145.
 - 4 同書、p.141.
 - 5 同書、p.142.
 - 6 同書、p.143.
 - 7 同書、p.142.
 - 8 西野淑美、「記号としての「カフェ」」、『フラット・カルチャー 現代日本の社会学』所収、遠藤知巳／編、セリカ書房、2010、p.54.
 - 9 同書、pp.54-55.
 - 10 同書、p.56.
 - 11 同書、p.55.
 - 12 ジルベール・コアン=セア、『フィルモロジー』、小笠原隆夫+大須賀武／訳、朝日出版社、1980、pp.78-79.
 - 13 西野、前掲書、p.60.
 - 14 コアン=セア、前掲書、p.78.
 - 15 西野、前掲書、p.55.
 - 16 同書、p.60.
 - 17 同書、p.61.
 - 18 同上。
 - 19 コアン=セア、前掲書、p.77.
 - 20 西野、前掲書、p.55.
 - 21 同上。
 - 22 同上。
 - 23 コアン=セア、前掲書、p.79.
 - 24 同書、p.80.
 - 25 同上。
 - 26 西野、前掲書、p.59.
 - 27 同書、p.54.
 - 28 ジル・ドゥルーズ、『差異と反復』、財津理／訳、河出書房新社、1992、p.334.
 - 29 西野、前掲書、p.57.
 - 30 同書、p.56.
 - 31 同書、p.57.
 - 32 柳宗悦、『茶と美』、講談社（講談社学術文庫）、2000、p.88.
 - 33 コアン=セア、前掲書、p.77.
 - 34 柳、前掲書、p.88.
 - 35 同上。
 - 36 ロラン・バルト、『明るい部屋』、花輪光／訳、みすず書房、1988、p.39.
 - 37 同上。
 - 38 同上。
 - 39 ドゥルーズ、前掲書、p.334.
 - 40 バルト、前掲書、p.14.
 - 41 柳、前掲書、p.30.
 - 42 バルト、前掲書、p.15.
 - 43 同上。
 - 44 同上。
 - 45 同上。
 - 46 柳、前掲書、p.244.
 - 47 同上。
 - 48 同上。
 - 49 同上。
 - 50 「「茶」の病い」（同書、pp.244-290. 所収）。
 - 51 同書、p.290.
 - 52 同上。
 - 53 同上。
 - 54 同上。

- 55 同書, p.289.
56 同書, p.290.
57 同書, p.289.
58 同上。
59 同上。
60 同上。
61 同書, p.271.
62 同上。
63 同上。
64 同書, p.272.
65 同上。
66 同上。
67 同上。
68 同書, p.273.
69 同上。
70 同書, p.272.
71 同上。
72 同上。
73 同書, p.273.
74 同上。
75 同書, p.272.
76 同書, p.274.
77 同書, p.275.
78 同書, p.265.
79 同書, pp.265-266.
80 同書, p.269.
81 同上。
82 同上。
83 「茶道を想う」(同書pp.138-160. 所収)。
84 同書, p.141.
85 同上。
86 同書, p.159.
87 同書, p.153.
88 同上。
89 同書, p.160.
90 同書, p.148.
91 近藤京嗣, 「柳宗悦と茶」, 『柳宗悦全集』第17巻「月報16」所収, 筑摩書房, 1982, p.3.
92 乙訓健二, 「民藝館の茶会」, 『柳宗悦全集』第17巻「月報16」所収, 筑摩書房, 1982, p.10.
93 同上。
94 近藤, 前掲書, p.3.
95 乙訓, 前掲書, p.10.
96 同書, p.11.
97 同上。
98 岡倉天心, 『英文収録 茶の本』, 桶谷秀昭／訳, 講談社(講談社学術文庫), 1994, p.209.
99 同上。
100 同書, p.213.
101 柳, 前掲書, p.20.
102 岡倉, 前掲書, p.198.
103 柳, 前掲書, p.145.
104 同上。
105 岡倉, 前掲書, p.194.
106 井伊直弼, 「茶湯一会集・閑夜茶話」, 岩波書店(岩波文庫), 2010, p.9.
107 ドゥルーズ, 前掲書, p.439.
108 同上。
109 同上。
110 同書, p.363.
111 井伊, 前掲書, pp.132-133.
112 岡倉, 前掲書, p.198.
113 ドゥルーズ, 前掲書, p.439.
114 山上宗二, 『山上宗二記』, 岩波書店(岩波文庫), 2006, p.95.
115 柳, 前掲書, p.80.
116 岡倉, 前掲書, p.213.
117 柳, 前掲書, p.78.
118 アンリ・ベルクソン, 『物質と記憶』, 田島節夫／訳, 白水社, 1999, pp.169-170.
119 同書, p.151.
120 同書, p.40.
121 岡倉, 前掲書, pp.197-198.
122 ベルクソン, 前掲書, p.40.
123 柳, 前掲書, p.282.
124 同上。
125 同書, p.281.
126 同上。
127 同書, p.98.
128 西野, 前掲書, pp.60-61.
129 柳, 前掲書, pp.76-77.